広報 すぎなみ
Suginami
みどり豊かな　住まいのみやこ
11/15
令和4年（2022年）
No.2341

ピアノと文筆。阿佐ヶ谷文士の傍らで

40年以上にわたり演奏活動を続けるピアニストの青柳いづみこさん。多くの著書、文学賞受賞歴を持つ文筆家としての顔も持ちます。そんな青柳さんの祖父は阿佐ヶ谷文士の一人として知られるフランス文学者・青柳瑞穂。かつて多くの文士が集った場所であり、祖父との思い出が今も息づく阿佐谷の自宅で話を伺いました。

特集
人
すぎなみビト

青柳いづみこ

ピアニスト・文筆家

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1　3312-2111（代表）FAX 3312-9911（広報課直通）　区ホームページ：https://www.city.suginami.tokyo.jp/　発行：杉並区　編集：広報課

お知らせ　新型コロナウイルスの感染状況によっては、本紙掲載の催し等が変更・延期または中止になる場合があります。最新情報は、区ホームページをご確認ください。

広報すぎなみは月２回（１・15日）発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。

SUGINAMI 90th ANNIVERSARY
杉並区区制施行90周年

阿佐ヶ谷文士たちが語らい合った空気感は今も残っています。

プロフィール：青柳いづみこ（あおやぎ・いづみこ） ピアニスト・文筆家。大阪音楽大学名誉教授。世田谷生まれ。3歳半の時に、フランス文学者で阿佐ヶ谷文士の一人に名を連ねる祖父・青柳瑞穂の暮らす阿佐谷の家に転居。東京藝術大学大学院修士課程修了後、フランスの国立マルセイユ音楽院で学び首席で卒業。帰国後、ドビュッシー研究で東京藝術大学大学院博士課程修了。ピアニストとして活躍しながら、文筆家としても「翼のはえた指」（白水社）で吉田秀和賞、「青柳瑞穂の生涯」（平凡社ライブラリー）で日本エッセイスト・クラブ賞、「六本指のゴルトベルク」（岩波書店）で講談社エッセイ賞受賞など活躍。

6歳でピアノを始め、ピアニストの道へ

―青柳家は代々、阿佐谷の地にお住まいとお聞きしています。

阿佐谷のこの家は、祖父が大正13年に結婚して移り住んだ日本家屋です。本日お招きしたこちらのピアノの部屋は、後から改築して昭和50年に造った防音室です。今でも毎日、朝起きるとまずここでピアノを弾くのが私の日課です。歯を磨くのと同じような感覚。日々のやるべきことの一つですね。

―お祖父（じい）さん（フランス文学者・青柳瑞穂）と共に暮らした幼少期には、どのような思い出がありますか？

生まれたのは世田谷で、祖父が暮らすこの家に越してきたのは3歳半の時。共同玄関を挟んで棟続きに、祖父の家と私たち家族の家がありました。祖父と父は同じ敷地内で生活しているにもかかわらず絶縁状態でしたので、交流があるのは私だけ。理系の学者である父のいるわが家と、文学者の祖父の家とでは、ドアー一つ隔ててまるで別世界でした。双方を行き来しながら、よく祖父の本棚をあさりに行きましたね。祖父の原稿を取りに来る編集者が私のために持ってきてくれた本や、祖父が翻訳に関わった「世界文学全集」など、いろんな海外文学に幼い頃から親しんでいました。

―ピアノを始めたのはいつだったのですか？

親の勧めで6歳の時に習い始めました。桐朋学園の音楽教室に通い、小学校に上がってからは練習量が増えて近所の同級生と遊ぶ時間がなくなったため、地元の学校から学芸大付属の小学校へ転校しました。学芸大付属中学を経て、国立唯一の音楽高校である藝大付属高校に進学。当時の同校は普通の勉強は午前だけで、午後は音楽科目がびっしり。「えらいところに来たな」と子ども心に思いましたね。こうして、ピアノ漬けの毎日を過ごし、東京藝術大学、同大学院修士課程を修了後にフランスの国立マルセイユ音楽院へ留学。帰国後にデビューしました。幼い頃からピアノを弾いてきましたが、私自身プロのピアニストに憧れたことはなかったんです。当時の多くのピアニストがそうであったように、親の意向で習い始め、ある程度筋がいいとピアニストになるためのレールが自然と敷かれていく。疑う余地もなく進んでいったのですが、今となってはピアノを弾くことは私の「義務」です。

ピアニストであり、文筆家であるということ

―文筆活動はどのように始まったのですか？

文章を書くことは中学生の時に始めました。仲のいい同級生が童話好きで同人誌を作っていて、私もそこで童話を書くことになりました。それまで海外文学はいろいろと読んできたけれど、童話はほとんど読んだことがなかったので手探りで。書いたものを祖父のところへ持っていって読んでもらうこともありました。「句読点の付け方が俺に似ている」なんて言いながら、喜んでいたのを覚えています。

―中学生で始めた文筆活動は、ピアニストを目指す傍らでも続いたのですか？

そうですね。母方の祖母が個人雑誌を作っていたので、そこに毎号エッセイを寄稿したりしていました。ある時、その雑誌の編集者が私の留学先のマルセイユに手紙をくれて、そこには「ピアノの修行で行かれているのでしょうが、どうぞ文筆のほうの修行も続けてください。あなたの書いたものがまた読みたいので」とつづられていました。そんな励ましも刺激になったのでしょうね。ピアニストになるための修行を続ける一方で、書くことも少しずつ続けていきました。

―ピアニストとしてデビューしながらも、大学院で博士号を取ろうと考えたのはなぜだったのですか？

デビュー後、音楽雑誌からエッセイなどの執筆依頼が続いたのですが、そんな私を見た恩師の安川加壽子先生が、頼まれるままに書き散らすのではなくきちんと勉強してみてはと勧めてくださったのがきっかけです。元々、一つのことを突き詰めて考えるのが好きで、修士論文を書いた頃のわくわくする気持ちが忘れられなかったというのもあります。藝大の博士課程へ再入学し、論文「ドビュッシーと世紀末の美学」を書き上げて学術博士号を取得しました。

―ピアノと文筆、二つは共鳴するものなのでしょうか？

ピアノを弾くことと文章を書くことは、私にとっては全く別物ですね。使う脳が違う感じがします。どちらかに没頭した後の数日間は、もう一つのことができなくなったりします。私自身は二つに共通項はないように感じていましたが、人からは「文章のリズム感が音楽のリズム感と共通していて読みやすい」といったことを度々言われます。確かに、どちらにおいてもイントネーションとリズムが大切です。

©N. Nakamura

文士たちが集った、阿佐谷の青柳家

―今でもふとお祖父さんを思い出す瞬間などはありますか？

いろいろありますが、例えば玄関。共同玄関で、いつだったか祖父とばったり鉢合わせたことがありました。私が高校でフランス語を勉強していたのを聞きつけたのか、出会い頭に突然「○○の動詞の活用形を言ってみろ」と祖父が言い出したんです。あまりに急で私がつっかえながら答えると「ダメじゃないか」と笑われて。今でも古い引き戸をガタガタと開けた時、そんな祖父とのひとときがよみがえることがあります。

―ご自宅は、太宰治・井伏鱒二といった阿佐ヶ谷文士たちが集う場所でもあったそうですね。

「阿佐ヶ谷会」という中央線沿線の文士たちの飲み会が行われていたようです。太宰は私が生まれる前に亡くなっているので当然会ったことはありませんし、私が顔を出すようなことはありませんでしたが、残されている名簿を見るとさまざまな文学者が名を連ねています。幼い頃に庭で遊びながらチラチラと会の様子を見ていたのは覚えています。台所を手伝う、見るからに玄人といった装いの女将（おかみ）さんたちを「きれいだなあ」と子どもながらに眺めていました。

―なぜ青柳家に集うようになったのでしょうか？

祖父は骨董（こっとう）の蒐集（しゅうしゅう）をしており、器がたくさんあって酒を飲むのにちょうどよかったというのが理由の一つのようです。新しい骨董品を手に入れた際は、私に披露することもありました。でも祖父と私の好みは違っていて、祖父が見せてくる華やかな器は好きになれなかった。得意げに見せてくる祖父を前に、やや気まずさもありました（笑）。ちなみに太宰が、祖父の家にあるものは何でも骨董品だと思い込み、アルマイトのやかんを指さして「あれは何ですか」と聞いたという笑い話もあります。

変わりゆくまちを歩きながら感じること

―エッセイ「阿佐ヶ谷アタリデ大ザケノンダ」にはいろんなお店が出てきてガイドブックさながらです。

飲み屋さんや料理屋さんがたくさん出てきますよね。私自身お酒が大好きで、阿佐谷にも行きつけのお店がたくさんあります。祖父もやはり酒好きで、飲み交わす機会はありませんでしたが、晩酌する祖父にカラスミや竜眼（りゅうがん）といった珍味を食べさせてもらった、つまみの記憶は残っています。

―杉並区は今年で区制施行90周年を迎えました。このまちの魅力、好きなところをぜひ教えてください。

私はこのまちの商店街を歩くのが好きですね。昔から変わらないなじみの個人商店もあるけれど、そういった店がどんどんなくなってきているなと感じます。ちょっと悲しいですね。地域の連帯の要となっていた祭りやイベントが、コロナ禍で中断してしまったことも、商店街にとって大きな打撃になっていることを、エッセイ執筆時の取材で知りました。長く続いてきた店の継ぎ手がいないといった課題も大きいようです。90周年を迎えた杉並区、時代とともに変わりゆくなかで、それでも阿佐ヶ谷文士たちが大酒を飲んで語らい合ったこのまち特有の空気感は今も残っていると私は感じています。

多くの文士が集った 阿佐ヶ谷会とは？

阿佐ヶ谷会は、中央線沿線の暮らしやすさに惹かれた若手文士たちが、交遊を深める目的で、昭和初期に「阿佐ヶ谷将棋会」として発足しました。将棋は夕方までで、その後は飲み会に。昭和20年代からは、青柳瑞穂邸を会場にし、親睦を深めていたそうです。飲み会はにぎやかだったようで、上林暁が酔って皿鉢を壊してしまいすぐに青柳瑞穂に謝ると、骨董収集家でもあった青柳瑞穂は「壊して困るようなものは出していない」と言ったとか。

関連イベントは15面へ

阿佐ヶ谷会の主なメンバー

井伏鱒二、上林暁、木山捷平、青柳瑞穂、外村繁、小田嶽夫、浅見淵、亀井勝一郎、中村地平、村上菊一郎、河盛好蔵、島村利正、巌谷大四　など

幻戯書房出版『「阿佐ヶ谷会」文学アルバム』より、「阿佐ヶ谷会風景」

抽選で3名に
青柳いづみこさんのサイン入りCDをプレゼント！

下記3タイトルのいずれかをプレゼント！
・Chanson d'autrefois
・春の祭典　ペトルーシュカ
・大田黒元雄のピアノ－100年の余韻－
※タイトルを選ぶことはできません。

応募方法
はがき・Eメールでご応募ください。
▶締め切り日＝12月1日（消印有効）

【対　　象】区内在住・在勤・在学の方
【記入要領】①郵便番号・住所②氏名③年齢④青柳いづみこさんのインタビュー、「広報すぎなみ」の感想・意見など
【宛　　先】広報課広報係 koho-suginami@city.suginami.lg.jp
※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。応募の際に得た個人情報は、プレゼントの発送にのみ使用します。
【問い合わせ】同係